

# 中干し後の適切な水管理、生育診断による的確な穂肥で収量・品質を確保！

## 1. 6月18日現在の稲姿

●はまなす・吉川管内生育調査圃 調査結果（6月18日現在）【（ ）内数字は前年結果】

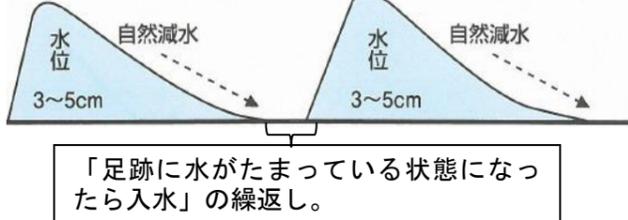
地区	下条 (柿崎)	上金原 (柿崎)	片田 (吉川)	赤沢 (吉川)	山直海 (吉川)
品種	5割BL	わたぼうし	コシヒカリBL	五百万石	コシヒカリBL
田植え日	5月8日	5月11日	5月12日	5月12日	5月17日
栽植密度(本/坪)	51.2	57.8	43.2	52.8	51.8
草丈(cm)	39.1 (43.9)	41.4 (41.9)	46.1 (46)	41.7 (40.2)	41 (40.1)
茎数(本/株)	18.7 (32.2)	28.7 (26)	23.2 (33.8)	29.5 (35.7)	16.6 (22.6)
茎数(本/m <sup>2</sup> )	327.2 (483)	502.2 (405.6)	303.9 (422.5)	472 (578.3)	260.6 (386.4)
葉齢(葉)	6.5 (9.4)	8.8 (9.4)	8.3 (8.9)	9.1 (9.6)	8.54 (7.6)
葉色(SPAD)	45.2 (42.3)	45 (45.1)	43.7 (42)	44.3 (43)	41.1 (42.1)

●5月中旬以降の天候不良による生育の遅れが心配されましたが、6月上旬以降の高温で生育は旺盛になっております。出穂期予想では、「早生は平年より2日程度早い」、「コシヒカリは平年並み」の予想となっておりますが、ご自身の稲の生育状況を確認し適期穂肥の対応をお願いいたします。

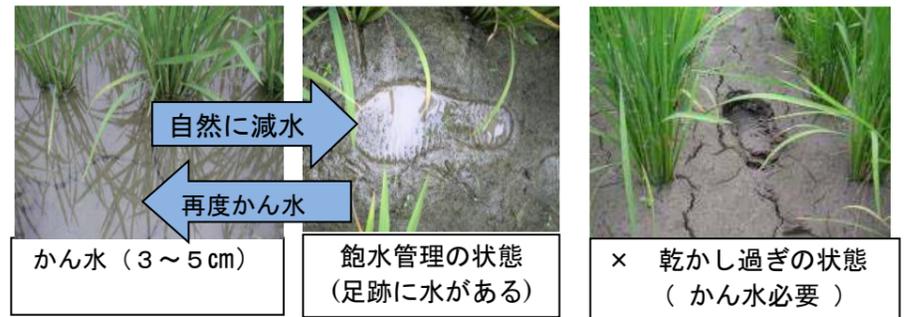
## 2 中干し後の水管理

- (1) 出穂1か月前には中干しを終了する。
- (2) その後は、浅水の間断かん水から徐々に飽水管理（田面や足跡や溝に水が溜まっている状態）へ移行する。

飽水管理のイメージ



【飽水管理の方法】



## 3 出穂期予想と穂肥時期のめやす(6月13日現在)

品種	出穂予想日	1回目穂肥		2回目穂肥		合計窒素施用量 (kg/10a) ※
		時期	出穂前日数	時期	出穂前日数	
新潟次郎	7/16頃	6/16~6/21頃	30~25	7/2頃	14	6
五百万石	7/19頃	6/29頃	20	7/7頃	12	1~2
つきあかり	7/19頃	6/19~6/24頃	30~25	7/5頃	14	3~3.5
わたぼうし	7/21頃	6/29~7/1頃	22~20	7/11~7/13頃	12~10	2~3
こしいぶき	7/25頃	7/2頃	23	7/11頃	14	2~3
こがねもち	7/29頃	7/11~7/24頃	18~15	7/19頃	10	1~3
コシヒカリ	8/1頃	7/14~7/17頃	18~15	7/22頃	10	1~3

○稚苗5月10~15日頃、中苗5月15~20日頃の移植を想定  
○穂肥時期は化成肥料の使用を想定。  
○今後の気象等で出穂期は変動する。  
○つきあかりや新潟次郎で穂肥時期のめやす前に葉色が低下した場合は、早めに穂肥を施用する。  
※合計窒素施用量を2回に分けて施用する

注)出穂期はほ場間で差があり、今後の天候によっても前後します。

新潟次郎・五百万石・つきあかり・わたぼうしは本資料配布時には一回目穂肥時期に差し掛かりますので、圃場内の確認をお願いいたします。

## 4 穂肥のポイント ~ ほ場ごとに生育診断を行いましょう! ~

穂肥時期の判断は、幼穂形成期(幼穂長0.1cmの時期)を確認し、遅れずに穂肥を施用しましょう。1回目穂肥は、穂数や粒数確保による収量向上、2回目穂肥は登熟向上に効果があります。施用にあたっては倒伏や粒数過剰を防ぎ、後期栄養を確保するため、必ずほ場ごとに生育診断を行いましょう。

(1)穂肥施用量のめやす ~ 1回目穂肥は、各品種の適期に遅れずに施用する。2回目穂肥は、1回目穂肥の概ね10日後に施用する ~

品種名	合計施用量 (Nkg/10a)	留意点
新潟次郎	6	1回目穂肥は遅れないよう注意する。1回目の穂肥施用量は3kg/10a。合計6kgをめやすとする。
五百万石	1~2	穂肥は1回目に重点を置く。出穂期25日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
つきあかり	3~3.5	出穂期頃まで葉色(SPAD値)40以上を保つ。出穂期25日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
わたぼうし	2~3	1回目穂肥は出穂期22~23日前、2回目は出穂期12~10日前に施用する。出穂期25日後まで飽水管理とし、早期落水はしない。
こしいぶき	2~3	1回目穂肥は幼穂形成期に施用。低地力ほ場や後期栄養不足が懸念される場合は、1回当たりの窒素成分量を1.5kg/10aとする。
こがねもち	1~3	生育過剰の場合は遅めの1回目施用とし、1~1.5kg/10aにとどめる。
コシヒカリBL	1~3	1回目の穂肥は草丈・葉色等稲姿を確認し判断。2回目は後期栄養持続の為、確実に施用。

(2) コシヒカリの穂肥診断 ～下記の調査結果を基に、穂肥時期及び量を判断する～

【1回目の穂肥時期及び施用量：幼穂形成期(出穂 24 日前頃)の生育による診断】

葉色(単葉) 草丈	SPAD 値 34~32 葉色板 4.2~3.9	SPAD 値 35 以上 葉色板 4.4 以上
70~75cm 以内	時期・量とも基準どおり施用 →出穂 18 日前:1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 →出穂 15 日前:1.0kg/10a
75~80cm 以内	施用量を減らす →出穂 18 日前:0.5~0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂 15 日前:0.5~0.8kg/10a
80cm 以上	施用できない	施用できない

【2回目の穂肥時期及び施用量：出穂 12 日前頃の診断】

出穂 14~12 日前の葉色(単葉)	出穂 10 日前の穂肥量(10a 当たり)
SPAD 値 32~34 葉色板 4.2~4.5	基準量どおり施用 1.0~1.5kg
SPAD 値 35 以上 葉色板 4.6 以上	施用量を減らす 0.7~1.0kg 未満

(3) 全量基肥肥料の場合 (一発元肥)

全量基肥肥料体系の場合、分施肥体系の穂肥散布時期に飽水管理を徹底し、土壌中の水分を保持しましょう。

**※全量基肥肥料であっても、葉色低下が見られる場合は施用する。**

(4) 穂肥施用時期の確認方法

① 【幼穂長の測定による診断】

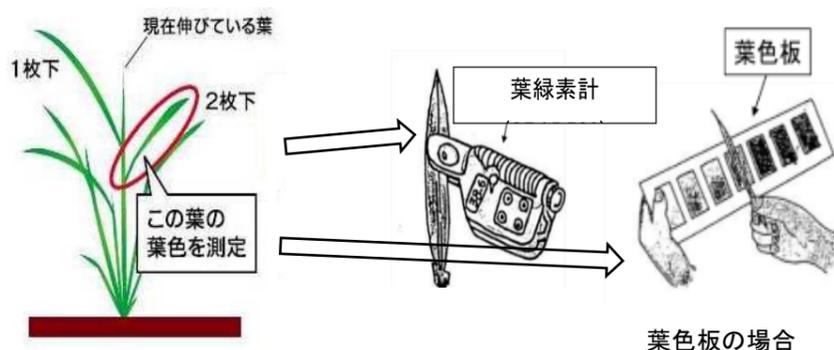
カッターなどで割る



【幼穂長と出穂前日数のめやす】

幼穂長(cm)	出穂前日数
0.02	30 日
0.1	24 日
0.2	20 日
0.5~1.0	18 日
4.0~6.0	12 日
10.0~12.0	10 日

② 【葉色(単葉)を測る】



## 5. 病害虫対策

(1) 斑点米カメムシ類

○予察調査の結果、今年もカメムシ類の発生が確認されており、斑点米の発生が懸念される。

○生息地となる畦畔・農道は、イネの出穂以降もイネ科雑草が出穂・結実する前に除草を行う。水田内のヒエやホタルイについてもカメムシ類の増殖場所となるため本田除草を徹底する。

品質(有効成分)	成分数	規格	対象害虫	使用量・処理方法
スタークル粒剤	1	3 kg	カメムシ類	3 kg/10a 出穂期~7 日後 ごく浅水で散布
スタークル豆つぶ	1	250 g	カメムシ類	250 g /10a 出穂~7 日後 湛水散布
キラップ粒剤	1	3 kg	カメムシ類	3 kg/10a 出穂 10 日前~出穂期まで ごく浅水で散布

(2) いもち病

○葉いもちは早期発見・早期防除に努める。

○わたぼうしはほ場抵抗性が弱いため穂いもち防除を実施する。

品質(有効成分)	成分数	規格	対象病害	使用量・処理方法
オリゼメート粒剤	1	3 kg	いもち病	3~4 kg/10a 収穫 14 日前まで 葉いもち病予防
フジワン粒剤	1	3 kg	いもち病	3~5 kg/10a 収穫 30 日前まで 穂いもち病予防、出穂 20 日前
ブラシン粉剤DL	2	3 kg	いもち病・変色米	3~4 kg/10a 発生初期 収穫 7 日前まで

(3) 紋枯病

○出穂後に高温にあいやすい早生品種や、株間の風通しが悪い圃場などに発生しやすいので注意する。

○前年に紋枯病が多発したほ場では、翌年の伝染源となる菌核が多く、今年も多発するおそれがあるため、予防剤の散布等、薬剤防除を適切に行う。

品質(有効成分)	成分数	規格	対象病害	使用量・処理方法
リンパー粒剤	1	3 kg	紋枯病	3 kg/10a 収穫 30 前まで 速効性、予防、治癒効果 残効性も有する
バリダシン粉剤DL	0	3 kg	紋枯病	3~4 kg/10a 1 回目: 10 日前~出穂期直前、2 回目: 穂揃期頃

**※JA5割低減コシヒカリ、エコ研等地域特裁米は使用農薬が決められておりますので、ご注意ください。**

お問い合わせ先(TEL) 頸北わかば営農センター：025-530-3000